

### 第3回課題

11月に訪問した東京大空襲・戦災資料センターで早乙女勝元氏、山本唯人氏のお話を伺い、そこで自分の関心にひきつけて考え始めてしまった「問い」や今後取り組みたい（取り組んだほうがいい）と思ったことをメンバーが綴った。

墨田区で色々な出来事の裏方をしてきた私はこのエリアの活動の豊かさに関してよく質問を受ける。そして答える。答えるとき過去どのような時代を経験してきたかを語ることが多い。ストーンと理解してくれるからだ。「関東大震災や東京大空襲の被害を免れたエリア」という言い方だ。

『東京大空襲』を読み私は罪悪感を自分の中に見つけた。なんて軽々しく「東京大空襲の被害」という言葉を使っていたんだ。実際にどのようなことが起きたのかを知らずしてこの言葉を使っていた自分に愕然とした。もう使えない、使いたくない、使えば使うほど本からにじみ出る風景が立ち上がる。でも語らねばならない、語りたい。墨田区で何が起きているか、私なりに見てきたことは伝えたい。

「聞いてしまった、知ってしまった、気づいてしまった責任ということに対してどのように向き合えばいいのか」という、早乙女さんへの質問は時間がなくて叶わなかったが、学芸員の山本さんにはぶつけることができた。彼はとても丁寧に優しく受け止めてくださって「語りの更新が必要、そのタイミングかもしれない」という切り口を見つけてくださった。

数週間たったが私はまだ何も見つけられていない。

(ヨネザワエリカ)

「聞いた側の責任として、どのように後に引き継ぐか」考えたのは、この一点だった。記憶、過去を引き継ぐこと、更に、その責任が問われている。簡単に答えることのできない問いである。

東京大空襲は知っていた。しかし、関心を持つことはなかった。それは、年表の一行でしかなく、人を感じる事がなかった為と考える。しかし、そこに人格が加わってしまった。一行であったものに、人の記憶という膨大な行が加えられたのである。それ以降、無視することはできないという関心と、当事者ではないというジレンマが見え隠れしている。それは、「引き継ぐ」「責任」この問いの答えが見つからないからである。

しかし、ある作品との出会いからひとつの方向性を見出した。

東京大空襲と同時期に東京で過ごした方々に、その時の日常を聞く。大人には大人の、子供には子供の日常があったであろう。それらを多く集めることが、私にとっての「引き継ぐこと」「責任」になるのではと考えた。当事者ではない私に、東京大空襲に対しフィルタリングをすることはできない。しかし、今後、関心を持った人の為に、声を聞き、考えを整理するための「声」を集め、残すことはできると考えたのである。

(佐藤卓也)

誰かの話を聞くためには、まず、自分の話を聞かなければ。

早乙女さんの話を聞きに行く前から、本当は薄ら気付いていたことが、確信になってしまった。私にとっては、10月14日の第一の感想はそれだった。早乙女さんは、自分自身に対して何十年も話を聞いていると仰っていた。他者の話は逆に、何回も聞きに行くことはあまりないというのは、「出会ってしまった」という一回性の感覚を大事にしているのかもしれない。その意味で、早乙女さんの聞き方はとても身体的だと思った。人の話を自分の身体で受け止め、新たな言葉に書き換えて伝えていく。聞いた話を補う形でフィクションにしていくという表現もまた、身体や感覚という土台があってこそできることだと思う。なぜなら、現実の延長線上にフィクションを置いているということは、まずその現実を細部まで見たり、あるいは時間が経ってから記憶を辿ったりすべく体力と勇気が必要だと思うからだ。後半で山本さんのお話を伺い、緻密に記録を辿って行った先に、それでも記録が残しきれない余白があると知ったからこそ、早乙女さんの残し方は対比的に感じた。

さて、「自分の話を聞く」ということについて。私は過去何度かそれを試みては、雪崩出るものを受け止めきれず、放置してやり過ごす、ということをご数年続けてきた感覚だった。自分がいつもつまづいてしまう課題があって、それはきっとあの経験を解明しきれていないからだろう、と何となく感づいてはいる。しかし、自分の話を聞くというのは、ものすごく怖い。少なくとも私にとって、聞いてしまったからには、言葉にしてしまったからには、せつなく築いてきた今の生活を、もう同じようには過ごせなくなるのではないか、という妙な心配からくる恐怖だった。だが、「セクシュアリティを語る」をテーマにする前に、自分が自分自身を語れなくてどうする、自分の話を聞けなくてどうするという自覚があの日以降沸き上がり、私は今、自分の話を聞くのを試みている。辛くて今も心に引っかかっている経験を、できるだけ細部まで言葉にする挑戦だ。今までもその辛かった経験をノートに書くことはあったけれど、私の場合はどちらかというと抽象的に感覚を表現することが多かった。それを今回は、印象に残っている風景や人に言われた言葉を、記録するように書いている。そうすると、芋ずる式に他の風景も思い出されたり、今までとは違う視点でその経験を見られたりした。翌日も仕事がある平日の疲れた夜中に、なんで泣きながら書いてなきやならないのかと思うし、フラッシュバックではないけれど、いつもより過去に引っ張られて落ち込んでしまう自分もいる。しかしなぜか、自分の話を聞くのも悪くない、と思えてきている。骨くらい捨ってくれるかな、と思える他者がいるからかもしれないけれど、もしかしたら、好奇心が恐怖を上回ろうとしているのかもしれない。少しずつ。

「自分に関心を持って」と高校の先生に言われたことがある。その時はこんなに悩みが多い私になぜそう言われるのか、よくわからなかった。でも、私は私の腹の底の景色を見ようとしていないだけだった。聞こうとしないだけだった。

(八木まどか)

これまでのラボの中で、やはり早乙女さんの話は私に大きな影響を与えている。語ること、伝えること、といった表現の枠組みにももちろん関心はありつつも、東京という場所で生きた人々のことを横に置いておけない。今後は自分が今住んでいる下町の誰かに、話を聞くことになるだろう。

私が住んでいる東向島は「玉の井」と以前呼ばれており、赤線街があった。最近、夜の「猫さんぽ」というものが日課になっている。今は「いろは通り」と呼ばれているそこに行っては、野良猫を見つけて観察する。この猫さんぽは飼っていた「東京」という猫が6月に死ん

で以来続いている。「東京」は野良猫だったので、火葬してお墓に入れることは不自然な感じがして、廃校の桜の木の下に埋めた。最近、そこから桜の木の芽や草が伸びてきた。下町と猫はとても仲が良い。今でも東向島では町の人と野良猫を共有して大切にしており、会えば猫の話をする。見なくなった野良猫のことは敢えて言葉にしなくても、死の予感を互いに共有する。野良猫はどこかで死んでいて土に潜っている。猫は時間を超えて、人と人の間を行き来する、私にとっての下町の空気感を象徴する存在のように思える。

(橋本佐枝子)

山本さんが触れていたハンナ・アレントの表現「忘却の穴」——存在の記憶がなくなった時に本当の意味で存在が消えること、について考えている。

人類が文明を得てこれまで歴史・記録に残してきたことなんて恐らくほんの一部に過ぎない。忘却の上に生きることの何が問題か。忘れ去られてしまうことばかりの中で、一体どこまでが本当に記憶されるべきだろう。

ただ確かに、戦争に限らず、嫌な出来事が繰り返される一因としては反省が忘れられることがあるはずなのだ。戦争体験について、自らは語りえない死者や語ることをしてしない被災者の記憶に何らかの居場所を与えることは、人類が平和に暮らせるようになるための着実な一歩であるなあということ、今更だけれど早乙女さんと山本さんに話を伺ってようやく実感として理解できたように思う。

記憶を継承することを真剣にやっている二人の態度に触れたからには、人類が進歩することについて、これまでより少し斜に構えずに考えることをしてみたいと思う。

(国分幹生)

何かに「出遭ってしまった」「受け取ってしまった」と感じる感受性＝器のあるなしで、ひとの人生は大きく変わる。そして、そのように感じ取られ内面に宿った種は、公私におけるある種の偶発性により発芽し花を咲かせ、うまくいけば実る。やがてそれは新しい種となり、拡散し、今度は誰かの心の中へ着地していく。

早乙女勝元さんのお話を伺う好機を得て、私はそのような循環を思った。また、触発された。たくさん交差点を作り出してみたい。自分という個人史の縦軸に社会という横軸の交わりをたくさん見つける。家族、友人、3331に集うひと、戦争、誰かの関心事、過去、未来など、例え瑣末な接点でも縦横無尽に引き寄せてみる。そこから何が見えてくるか、頭で考えるより先に「あたって砕ける」スピリットで行動し、着火点を模索したくなった。

アウトプットは、関心のないひとのこころを揺らす「斬新な表現方法」が必須だ。未開の地を切り拓いて道を作り出すより、時流の波にうまく乗れるサーファーのようなイメージで「今」に合う新たなスタイルを見つかる。そんな実験的な試みに挑戦したい。ヘビーな内容であればあるだけユーモアとやさしい声で語ることを心掛けながら。

(柳河加奈子)